

---

# 水泳少年

tei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水泳少年

### 【Nコード】

N77550

### 【作者名】

tei

### 【あらすじ】

泳ぎたい少年の話。水って良いですね。他サイトにも投稿しています。

足が、動かなかった。

どんなに努力しても、少年の足は、動かない。

「ああ、あの子が……、そうなのよ。可哀想にねえ」

「何でも水泳の才能があったそうじゃないの。大会に向けて一生懸命練習してたらしいのに、残念ね」

少年はとぼとぼと、車椅子で、堂々とひそひそ話をしている主婦の横を通り抜けた。少年自身、その交通事故は残酷だったと思っている。でも、そんなことを他人にまで言われたくはない。自分で思うだけでも、心が沈むというのに。

少年は、水の音に敏感になった。ちゃばちゃば、でも、ちょぼちょぼ、でも、それが水音であればささずそちらのほうを見て、確認した。自分はもう泳げないと知っているのに。水があっても、入ってはいけないというのに。

それでも彼は、雨が降れば窓の外を飽きずに見つめ、風呂の中でクロールの手付きを試してみたりなどするのだった。それは、泳ぎに対する未練だった。水に対する執着だった。

泳ぎたい。水に入りたい。気の済むまで、水の中で過ごしたい。気がつくと、彼は四六時中泳ぐことばかりを考えていた。到底叶わぬ願いを追い続ける事は、良くない。彼は勉強に打ち込むことで気を紛らそうとしたが、それもなかなか上手くいかなかった。

そんな日常が続いて、一年。ある日、彼は日課の散歩に出かけていた。雲行きが少し怪しかったが、雨は降らないという予報だったので、とりあえず折りたたみ傘だけ持って、彼は出かけた。車椅子の操作も慣れたもので、彼は通いなれた道を一人でたどっていた。一時間ほどそうしていたらどうか。

ぼっん。

最初の一粒が彼の額で弾けると、すぐに、滝のような雨が降りそいできた。彼は急いで傘を開いたが、そんなものは役に立たないくらい、その雨の勢いは凄まじかった。みるみるうちに彼はずぶぬれになり、体が冷えてゆく。

彼は傘を諦めて、もと来た道を急いだ。やがて、川の近くまで差し掛かったとき、彼の歩みは急にのろくなった。彼の目は、水かさを増しうねり流れる水に釘付けになった。

「  
」

彼は傘を放り出した。

彼は、車椅子を岸边まで操った。そして、思い切って自身を車椅子から地上へと投げ出した。青臭い草と土の匂いが、鼻を突く。

彼は土を掴みながら上体を起こし、川を見下ろした。  
水。

それは、水の集合体だった。それも、いつもとは違い、奔放に踊るような流れ方をしている。自分を呼んでいる。そう、彼には思えた。

彼は目を瞑らなかつた。ただ、笑って、水の中へと飛び込んでいった。足なんてモノは、彼には必要だつた。押し寄せる波に体を任せ、彼は一年振りに泳いだ。息ができなくても、目を開けていられなくなっても、彼は笑っていた。

やがて眠るように意識を手放した時、彼は小さな竜になり、空高く飛んでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7755o/>

---

水泳少年

2011年7月15日00時10分発行